

## 富山県呉西地区の菓子屋に現存する菓子木型の変遷

### Current transitions in wooden molds for Japanese sweets at sweet shops in the Gosei region of Toyama Prefecture

深井 康子  
FUKAI Yasuko

#### I はじめに

平成13年に調査した「富山の落雁（一）井波・城端地区の菓子屋の歴史と木型」<sup>1)</sup>に始まり、これまで食物栄養学科の卒業研究において菓子木型研究を行い、その研究成果は卒業論文集<sup>2-6)</sup>に報告してきた。平成15年に行った富山県内の菓子屋に現存する木型のアンケート調査を基礎資料として、県西部の石動、福光、高岡市の代表的な菓子屋に出向いて木型の写真撮影や紋様などを詳細に調べて継続している。

また著者は、「菓子木型の形と歴史に関する基礎研究」<sup>7)</sup>、「富山県における菓子木型今昔」<sup>8)</sup>を報告し、菓子木型から見える菓子屋の歴史と木型が次第に無用の道具になりつつある現実を知ることができた。

平成15年から平成17年には、城端町の田村萬成堂、平成21年には福光、石動の菓子屋を調査した。平成23年には高岡市、平成24年には富山市大山町歴史民俗資料館に村井米次郎氏が富山市中滝で菓子屋を営んでいたものを寄贈した木型を調査してきた。平成25年には田村萬成堂に同町で菓子屋を廃業し預かってほしいと頼まれた市村菓子舗の木型調査を行っている。

#### II 目的

本研究では、平成19年と平成23年に調査した富山県呉西地区の南砺市、小矢部市、高岡市の老舗菓子屋にあった木型を中心に特徴的な木型の紋様や数、特徴などをまとめた。そして富山県内の呉西地区の菓子木型から富山の菓子文化とくらしを支えてきた木型が辿ってきた現在までの変遷を振り返り、今後の木型の将来を探ってみることを目的とした。

#### III 調査方法

##### 1 調査菓子屋

富山県小矢部市の五郎丸屋（小矢部市中央町）およびかじわ屋（南砺市福光）、高岡市の不破福寿堂、大野屋を訪問した。店主の協力を得て、木型の寸法計測と写真撮影を行った。

また砺波市立砺波郷土資料館職員の紹介により、となみ散居村ミュージアム 民具館に寄贈された宮浦菓子店（砺波市西町）および五島松永堂（福野町御蔵町）の菓子木型の寸法計測と写真撮影を行った。

##### 2 調査日

五郎丸屋は平成21年9月30日、かじわ屋は同年11月8日、不破福寿堂は平成23年9月8日、

9日、大野屋は同年11月23日に出向いて調査を行った。となみ散居村ミュージアム 民具館には平成21年11月9日に訪ね、木型をみせてもらった。

### 3 調査内容

菓子木型の計測（図柄・長さ・幅・厚さ・持ち手・型の分類）及び写真撮影を行い、菓子屋の歴史や木型を調べ、生活との関連について店主より聞き取り調査を行った。

## IV 結果及び考察

### 1 菓子屋にみる木型の特徴

#### (1) 五郎丸屋

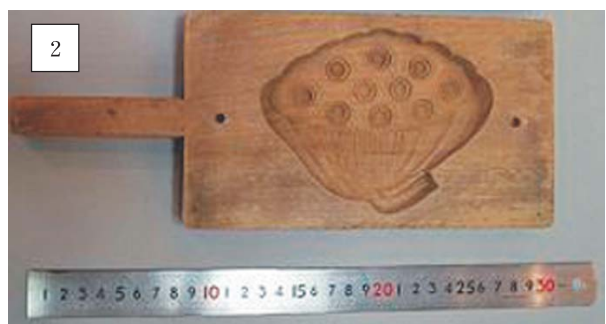
五郎丸屋は、創業250年を超える老舗で薄氷が有名である。薄氷は、富山特産の新大正米と高級和三盆を使用したお菓子で口の中に入れるとすっと溶け、和三盆の味が広がる独特の風味が特徴である。薄氷の歴史は古く、宝暦2年（1752年）以来その秘法を伝え、藩政時代には

禁裏や加賀藩主前田公より幕府に献上され明治28年10月には第4回内国勸業博覧会へ出品し大賞牌を授かるなど、その後も数多くの賞を受け茶道界からも推奨され、富山県を代表する菓子の一つである<sup>9)</sup>。

本調査では、過去に使用された菓子木型のうち式菓子と呼ばれる菓子に使用された木型を表1に表した。式菓子の木型は、4種ともに2枚型で持ち手の形が四角形で統一されており、寸法の違いはほとんど見られなかった。蓮だけでも花や葉、蓮根、蕾など複数の木型が存在した。

表1 式菓子用の木型計測

図柄	木型の寸法	
	長さ(持ち手)×幅×厚さ(cm)	
1 蓮花	20.9(9.2)	×11×4.7
2 蓮葉	20.9(8.8)	×11.7×4.6
3 蓮根	20.9(9.0)	×11.6×4.7
4 蓮 (葉・つぼみ)	20.3(9.1)	×11.4×4.6



現在、五郎丸屋では菓子木型を使う菓子はほとんど作っていないと当代の店主 渡辺 睦子氏は話してくれた。

式菓子には落雁が多く出され、そのために菓子木型を使用する。式菓子は、冠婚葬祭や祝宴に用いる菓子であり、宴席の引物で祝儀や不祝儀、法事、仏事に多く登場する。弔事の際は雲や蓮などの形を用いる。今回の調査のように蓮型の菓子は法事や不祝儀用が多く、その美しさに故人の冥福を願う気持ちが込められている。しかし、中国では蓮の花をおめでたい行事に使うので国により印象が違うことがわかった。

## (2) かじわ屋

かじわ屋は、明治2年創業の慶事・仏事を中心として地元福光で育んだ伝統を受け継いでいる菓子屋である。現在7代目の中村和靖氏が店主である。店舗のしおりに「祖の伝、手の風、郷の香をお菓子創りの原点にしています」とある<sup>10)</sup>。「祖の伝」はかじわ屋の伝統を、「手の風」は季節の語り部、そして「郷の香」は文化、風習、食材をそれぞれ意味すると書かれている。創業当時から記載してある今でいう分厚いお客様台帳が奥の陳列棚に飾ってあり歴史を物語っている。もち、まんじゅうを主な生業とし、茶会用の干菓子などもあり、地元の人々に昔から愛されてきた。菓子木型は落雁用、金花糖用がそれぞれ100個ほど、茶席、干菓子用が30個ほど、あんこ用が60個ほどある。その中には今まで出合ったことのない旧福光町の寺院の寺社紋を彫った「寺号型」の木型があった。

表2に福光町の寺院の寺社紋の木型と法事で用いた木型を示した。

教念寺、知源寺、隆永寺の寺号型計3個と、表と裏で違う寺号が彫られた木型が2個である。表と裏がある木型はそれぞれ、「妙敬寺・靈

表2 寺号型の木型

図柄	長さ(持ち手)×幅×厚さ(cm)	持ち手の形状
1 教念寺	24.0(9.3)×13.8×2.6	八角形
2 妙敬寺(表) 靈巖山(裏)	23.1(9.3)×10.7×2.8	長方形
3 知源寺	19.7(9.2)×10.7×2.7	長方形
4 隆永寺	22.5(9.0)×10.7×2.3	八角形
5 正等寺(表) 飛龍山(裏)	22.9(8.9)×11.8×2.9	長方形
6 法會	26.0(9.2)×15.2×4.3	長方形

巖山]、「正等寺・飛龍山」と彫っており、両面を使用して落雁が作られていたことがわかる。この寺号は報恩講に用いられていたと推察される。

寺社紋の落雁は、式典や祝い事の記念品などに用いられ、昭和30～40年を境に次第にその姿を見ることも少なくなったと考えられる。

持ち手の形状は八角形と長方形である。落雁の歴史を記した徳力彦之助の『落雁』(昭和42年)<sup>11)</sup>には、「持ち手の形をみれば木型が作られた時代がわかる」と記してあるが、どの木型も見ると、おそらく昭和の中ごろまで頻繁に使われたようだ。

寺号型は、寺にお金を寄付するときや、報恩講のとき、祝い事の記念品などに用いられた。真宗王国といわれる富山は、寺院の大多数を真宗寺院が占めるといわれている。真宗の数ある仏教行事の中でも報恩講は宗祖、親鸞の忌日として最も大切なものだ。

寺号型は信仰に息づいて利用されてきたが、今ではほとんどが忘れられ、ほこりをかぶって眠っていると店主は語っている。その背景には、生活様式の変化がある。平成15年、県内の菓子屋107店を対象に行った菓子木型の調査結果から、富山のくらしからみた木型の思い出が明らかになった。



寺号および法會の木型  
 注) 写真上の数字は表2の番号と対応する

- ・昭和18年、魚津の大火で木型を大半焼失した
- ・昭和20年、富山大空襲に遭い、全部焼失した
- ・昭和30年ごろ、法会などに料理菓子として木型をよく用いた
- ・昭和40～47年、この頃までは金花糖や落雁を多く作った

戦後、特に高度成長期には、紋が彫られた木型が新築や落成祝い菓子として使用され、菓子の注文が多かったという。当時の県内の目覚ましい経済発展が影響しているが次第に変化の兆候が見えてくる。

昭和40年以降、菓子屋の創業は少なくなっている。洋菓子の普及やお茶を飲む習慣がなくなり、食生活の嗜好の変化とともに使われなくなっていったと考えられる。

かじわ屋は慶事や仏事の菓子を多く扱っているため、木型の需要も健在である。オケソクの代わりに花びらや蓮の落雁を今でも木型で作るといふ。生活様式が変わっても年中行事や普段の生活に不可欠な木型が福光町にはなくてはならない生活の道具であることを教えてもらった。

### (3) となみ散居村ミュージアム民具館

民具館には宮浦菓子店（砺波市西町）から平成4年に金花糖の型、五島松永堂（福野町御蔵町）からは昭和54年に菓子判子などが寄贈された<sup>12)</sup>。金花糖は、砂糖を溶かし穴のある2枚型に流して固めた菓子であり、砂糖の性質を利用して様々な形にすることができる。判子は、菓子店の名前や文字が彫られ、7種20点が展示されていた。

今、これらの菓子道具から生まれる菓子はもうないが、菓子木型だけは、地域の伝統文化財として大切に地元のミュージアムに保管されて

いることがわかり、木型が地域の財産であることを改めて知ることができた。



となみ散居村ミュージアム民具館の菓子木型

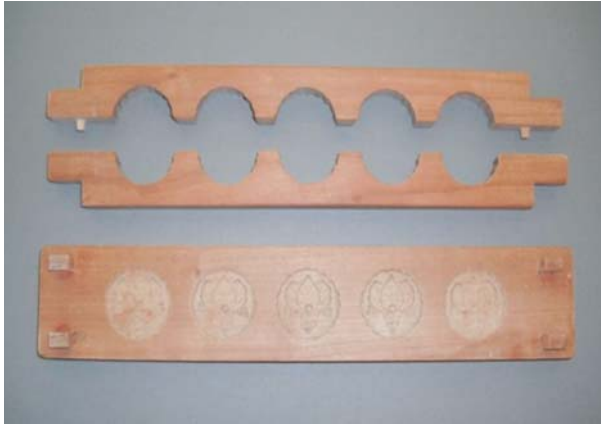
### (4) 不破福寿堂

不破福寿堂は、現在4代目の店主 不破崇之氏が継いでおり明治22（1889）年の創業から120年以上の歴史を持つ老舗菓子屋である。高岡の産業を支えてきた菓子文化に因んだものには「桐紋」と「梅鉢」の木型を使用した菓子があった。桐紋は、前田家が豊臣秀吉より賜った家紋で前田利家の菩提を弔うために建てられた瑞龍寺の襖など様々な装飾に使用されている。桐紋の落雁は、国宝瑞龍寺を象った銘が瑞龍桐紋とつけられ、平成10年に瑞龍寺が国宝の指定を受けて記念に作ったという2枚型の木型を使用した落雁である。

梅鉢の木型は、大・中・小のいずれも一枚型の木型で持ち手は四角形で比較的新しい年代に作られた木型であると示唆された。この落雁は剣梅鉢が由来となった前田家の家紋であり、前田利家の墓前祭に備えられる由緒ある落雁であることがわかった。

### (5) 大野屋

大野屋は、天保9（1838）年に創業し、170年以上も長い間続く伝統ある菓子屋である。現在の9代目店主は、富山県菓子工業組合の元理事長



桐紋 33.0×5.8×4.0(cm)



桐紋拡大図



瑞龍桐紋

大野隆一氏である。店内の一角には木型の展示コーナーが設けてあり、高岡の木型の歴史を辿ることができる。木型調査にあたり大野屋の土蔵に保管してある多くの木型を初めて見せてもらう機会となった。土蔵には数え切れないほど多くの木型があり、今まで他の菓子屋では見られなかった特徴的な木型を表3に表した。

吉祥や記念の紋様には、これまでは漢字が彫られたものばかりであったが勝利国を意味する「CONQUERNATIONS」や「TAKAMINE」と彫られた木型を発見した。「TAKAMINE」はおそらく高岡市御馬出町に加賀藩典医の長男として生まれ、医学・薬学界に多大な貢献をした高峰讓吉（1854～1922）に関する祝い事に使用したのではないかと推察された。

「二十五周年」と中心に彫りがある木型は、除幕式、卒業式、六百五十回忌などの小型の木札を目的に合わせて入れ替えて使うように工夫され、68枚みつかった。冠婚葬祭用の木型とし



梅鉢(大) 27.3(持ち手9.3)×12.8×3.3(cm)



落雁 剣梅鉢

てよく利用されていたと思われる。家紋<sup>13)</sup> <sup>14)</sup>を象った木型が24種類あり「丸に釘抜き」のように簡素なものから「丸に荒枝つき右三階松」など複雑な家紋まで多くあった。これらの特徴の木型は写真で示した。

高岡市内にはおよそ40店舗の菓子屋があり、そのなかで2店舗のみの調査であるが、不破福寿堂は現存する木型は少なかったが祭事で毎年使用される重要な役割を果たす木型があった。大野屋は、高岡市の日常生活に由来する歴史を感じさせるものが多く、特に家紋の木型は今までみることはなかった。これらの木型を通して高岡を開いた二代藩主前田利長の影響を受けた菓子文化の発達が反映されている。今後は高岡の菓子文化の歴史について木型の視点から詳細に調べる必要があると考えている。

表3 大野屋の菓子木型の紋様の種類と個数

紋様の分類	個数	種類
吉祥紋様 祝記念	24	大黒 恵比寿 福助 達磨・布袋・福助 招き猫 時計公益會 高商卒業式 桜中 英語簿記記念式 功労 CONQUERNATIONS TAKAMINE 中 T 扇 報告會 野球ボール 桜祝 梅祝 二十五周年 高岡 開業7周年 卒業式 結成式
家紋	24	かげ四方木瓜 丸に鶴 武田葵 丸に招き茗荷 三つ柏 剣片喰 丸に招き柏 丸に鷹 糸輪に陰木瓜 丸に釘抜 丸に四方木瓜 丸に五つ丁子 丸に三つ鱗 抱き茗荷 丸に荒枝つき右三階松 丸に五七桐 丸に抱き杏葉 丸に桔梗 丸に四つ目菱 丸に片喰 丸に頭合わせ三つ河骨 中陰剣片喰 丸に違い鷹の葉
植物類	9	蓮の花(2) 蓮の実 蓮の葉 菊 松 竹 梅 蔦
野菜類	9	筍(2) 瓢箪 西瓜 山葵 きのことへちま しめじ 野菜(きゅうりなど)
魚介類	7	海老(2) 大鯛(2) 鯛(2) 貝
果物類	3	葡萄(2) ザクロ
景色	3	花(2) 松
動物類	2	鶏 鶴
その他	10	紋様(5) 木型瓶 桜の雪洞 射水神社 万葉 原始模様



CONQUERNATIONS 27.9×10.6×2.9(cm)



TAKAMINE 14.2×7.0×4.7(cm)



丸に荒枝つき右三階松  
29.4×14.2×2.5(cm)



丸に釘抜  
29.1×14.4×2.7(cm)



二十五周年(上)10.0×3.8×1.0(cm)と  
替え木札

ここで木型を用いた落雁の誕生については、徳川時代の3代家光のころ長方形であった落雁が州浜型になり明和時代（1764～1771）ごろに様々な形や紋様を造ることを考えたのが始まりといわれている。寛政期の木型は型の彫が浅く、できた落雁が大変薄く、この頃疱瘡が流行したため厄除けに真赤な落雁が喜ばれた。寛政期後半の木型は型本体が大きなりに把手が貧弱であるが彫刻は堂々としている。さらに化政期は、四季の草花を主題としたものが圧倒的に多く、化政期に栄えた落雁は、そのまま安政期頃までは外観上大きな変化はなかったが、それ以降は急速に形式がくずれ去ったといわれている。

本研究で調査した木型については全てと比べていいほど型の彫が深く、江戸期のような浅い型は見当たらなかった。

## 2 木型からみえる呉西と呉東の菓子屋

菓子木型の調査をした結果<sup>15)</sup>、現在でも菓子木型を使って菓子を作っている菓子屋は、県西部が県東部より多いと推察される。北陸の菓子文化を支えてきた加賀藩の影響を県西部は特に地形的にも近いので受けやすかったと考えられる。

真宗王国といわれる富山県は、県下寺院の8割を真宗寺院が占め、昔から仏教が盛んなところである。仏教行事の代表的なものには、春秋の彼岸会、盆会、永代経、報恩講などがある。その中でも真宗では報恩講が宗祖親鸞の忌日として最も大切な日であり、檀門徒が寺に集まって勤行、説教とともに会食をする。その日は、寺院の祭りと同様に庶民の心をとらえるため、信者はこの日が来るのを心待ちにしたものである。

富山の食を考えると、このように信仰、つ

まり御満座（ごまんさん）・お盆・報恩講などや季節の節（小正月・春秋の祭り・針供養・冬至など）や農業などの労働や人生の節などの行事と風俗習慣との関連性をぬきにして語ることはできない。それほど富山は信仰に息づいた食の文化が伝承されている土地柄であり、人々の生活の拠り所として信仰が密接に関わっている。菓子木型を作った職人のことを思い、富山の味を心から味わいながら、菓子がコミュニケーションの場を潤すために役立ってくれることを願っている。

富山県の菓子屋の創業年は、昭和が53%（39店）で最も多く、明治が21%（15店）、大正が16%（12店）、江戸が10%（7店）の順であった。調査した菓子屋の半数以上が昭和時代の創業であり比較的新しいといえる。昭和を更に詳しく10年ごとにみると、昭和元年～9年が9店、昭和10年～19年が5店、昭和20年～29年が8店、昭和30年～39年が12店となり昭和30年代が特に多いのが特徴である。一方、昭和40年～63年の24年間では5店と極端に店舗数の減少がみられた。

菓子屋の現在の屋主が何代目になるかを調査しても呉東（35店舗）と呉西（38店舗）の特徴が見られた。呉東では、約半数近くが2代目であり、次に3代目、1代目と続き、6代目まであった。一方呉西では、2代目が9店で最も多いがその数は呉東より少なく、次に3代目、1代目と続き、呉東と同様の店舗数である。しかし、4代から15代まで幅広く分布しており、長年継続してきた菓子屋が多いことがわかる。つまりその土地の老舗と言われる菓子屋が多く存在することが示唆された。その理由として呉西地区は前田家と近く、菓子文化の発達が目覚しい地域であることにも由来するため老舗が多いのではないかと推察された。



## V おわりに

木型は、昭和47年頃までは多く使用され、かつては祝儀、不祝儀、供物などへの利用が多かった木型も今日では著しく利用が減少している。木型研究を平成13年から始めておよそ12年経過するが、その利用については呉西が呉東より圧倒的に生活様式に密着していることがわかった。木型で作る落雁のことを知らない若者も多い。祝事のハレの行事ではバームクーヘンなどの洋菓子や和菓子ではどら焼きが定番となっている。

城端の菓子屋では、初代の屋主から受け継いだ膨大な菓子木型の保存のため、富山県内の菓子屋で唯一「木型展示館」を平成24年に開館し、閲覧できるようにしている。店主の木型への愛着と先祖への感謝が伝わる展示となっている。また県内のある菓子屋は先祖を偲ぶ冊子『落雁 三鍋菓子屋』<sup>16)</sup>を作成した。そこには「冊子を作るのは、今しかない」と思ったと書かれている。

木型職人の数も近年めっきり減少し、今では数えるほどしか見当たらなくなった。日本の伝統工芸である逆彫りの技術こそ木型菓子の文化を支えてきたといえる。日本が歴史と文化を大切に考える時代を迎える今こそ、和菓子の木型をはじめ菓子道具類は貴重価値のある文化遺産となるであろう。

今後はこれまで調査した木型からみえる生活様式を歴史とともに見直し、まだ調査できなかった富山県内で使用された木型のルーツを辿りたいと考えている。

## 参考文献

- 1) 杉本ゆかり、浜田佳代、阿部仁美、田中詠子、東野公子：平成13年度卒業論文集、富山の落雁（一）－井波・城端地域の菓子屋の歴史と木型－、pp.43-44(2002)
- 2) 高畑弥生、山形麻衣：平成14年度卒業論文集、富山の落雁（二）－菓子の木型の特徴および歴史－、pp.31-32(2003)
- 3) 岡本由香、勝田 幸、熊野亜矢子、清水麻梨子、森山雪乃、柳瀬裕美子：平成15年度卒業論文集、富山の落雁（三）－富山に現存する菓子木型の実態調査－、pp.15-16(2004)
- 4) 海原志保、川腰梨奈、酒井那津世、竹内美咲：平成20年度卒業論文集、菓子道具としての菓子木型～中国・韓国・日本との比較～、pp.49-50(2009)
- 5) 荒井千尋、上野真美、島林友有乃、信清由果：平成23年度卒業論文集、高岡市の菓子屋に現存する木型調査、pp.23-24(2012)
- 6) 内山香、能登愛佳、林彩香、針山直子：平成24年度卒業論文集、富山市大山町に現存する菓子木型の実態調査、pp.19-20(2013)
- 7) 深井康子：菓子木型の形と歴史に関する基礎的研究、富山短期大学紀要、40、pp.51-62(2005)
- 8) 深井康子：富山県における菓子木型今昔、富山短期大学紀要、41、pp.47-59(2006)
- 9) 深井康子：木型を訪ねて 富山の和菓子⑦ 芸術的な氷の菓子、北日本新聞朝刊 12月17日（金）、p.29(2010)
- 10) 深井康子：木型を訪ねて 富山の和菓子⑥ 信仰に息づく寺号型、北日本新聞朝刊 11月9日（金）、p.31(2010)
- 11) 徳力彦之助：『落雁』、三彩社（1967）
- 12) 安ヶ川恵子：砺波の民具－砺波郷土資料館収蔵民具写真目録－、砺波市立砺波郷土資料館、pp.264-270(2006)
- 13) 伊藤幸作：『日本の紋章』、松本清喜堂、p.99 pp.123-125、p.160、pp.209-253(1965)

- 14) 古沢恒敏：『紋章大集成』、文園堂印刷、  
p.93、pp.123-128、p.160、p.209、pp.250-253  
(1970)
  - 15) 深井康子：信仰に息づく富山のくらしの視  
点からみた菓子木型の変遷、会誌 食文化  
研究、3、pp.31-38(2007)
  - 16) 三鍋久雄：『落雁 三鍋菓子屋』、三鍋菓  
子屋 (1998)
- (平成25年10月31日受付、平成25年11月15日受理)